Breakfast at Tiffany's
――映画と原作にみる主人公の違い――

大刀祢　美由紀

この作品は映画化され、主人公ホリーをオードリー・ヘップバーンが演じたので知っている人も多いのではないだろうか。

N.Y.でパーティ・ガールの浮草生活をしているホリーは、同じマンションに引っ越してきた小説家ポールに心惹かれる。ホリーには毎週木曜日に刑務所へ行く人物がおり、生活は謎に満ちていた。やがてポールも彼女に関心を寄せる様になる。小説が売れたポールは、ホリーとの結婚を真剣に考えるが、彼女はブラジルの外交官と婚約する。別れの食事をした夜、ホリーは麻薬密輸容疑で逮捕され、婚約も破棄された。ポールはホリーを警官から引き取り、彼女の生き方を厳しく戒める。雨の中、ホリーは彼の腕にしっかり抱かれた。というのが映画でのあらすじであるが、映画化の場合よくそうである様に原作とはかなり違ったものになっている。ポールは、映画では女性デザイナーの男妾みたいになっていたりするのだが、女性デザイナーなど原作には出てこない。そして原作とのもっと重大な違いは、ホリーが最後にポールと結ばれて終るが、映画の様にハッピーエンドになると、ホリーのイメージは無残に壊されてしまう、という事だ。彼女の本来の姿は自ら欲する所へ自由に飛翔してゆくという所にある。安定した住所、そして特定の男性を選び、その人に所属し、その人に仕えたいというのは世の女性達のささやかな願いでもあり、女性のもつ弱点とも言えるだろう。なぜなら属するということは、そのものに所有され、自分の自由を縛られることになるからだ。あれほど行動の自由を行使したホリーでもやはり女性の弱点から逃れられなかったのか。

ホセとの結婚――これは恐らく本気で考えたに違いないが、彼女の夢は結婚にあったのではなく、ブラジルという異国の地にあったのではないだろうか。もし結婚そのものを望むならば、近くに自分を愛してくれるポールもいただろうし、とりまきの金持ちの男達がたくさんいた。田舎医のゴライトリーもわざわざ彼女をテキサスから迎えに来たではないか。だからこそ、ホセに裏切られても、ホリーはやっぱりブラジルに飛び、更にはやがてアフリカまで放浪の旅を続けたのだ。彼女の名刺には住所はなく、住所の部分に「旅行中」と記してある。安住の所を欲しないからである。これが彼女らしさなのだ。「夢をあくまで追求する旅人」とでもいうべきか。

作者があえてホリーをプレイガールに仕立てたのにはきっと、今まで男には出来ても女には出来なかった事をやらせてみたかったからだろう。そして女性達の心に隠れている小さな夢を、現実の世界にぶつけたのだろうとも思う。

ホリー本来の姿を映画で表現されていないのは残念だが、こうした違いがあることで、逆に原作をより深く理解する近道になるのではなかろうか。

（指導教員　中村　敦志）